

人類の病根

現代は未来への投射がない。19世紀の作家たちは、まだ自分の作品を孫の世代が読むことを期待していた。しかし現代ではどの作家もそのような期待をもっていない。ひと昔前は、「将来に対する漠然たる不安」を感じて自殺したのは一部の思想家や作家であった。しかし現代では、もはや一般の青少年が将来への夢をもっていない。裕福で何不自由なく育った利口な13才の少年が、「ぼくが30才になるときにこの世の終りが来るんだ」と言っている。「こんな世の中に生れてくる子供が可愛そうだからぼくは結婚はしない」と断言している青年がいる。これほど極端ではないにしても、人生とはこんなものだとあきらめて、矮少な悦楽を求めて惰性的に生きている青少年が大多数である。この世に、人生に、心からの喜びをもって、yesと言い得る生がない。

考えられるいくつかの原因はある。世界の識者がなかなか警告しているにもかかわらず、現体制の政治家、世界の指導者たちは依然として核軍備の拡大競争に明け暮れ、しかもそれが現実的で大人の判断であると思込んでいる。第一次大戦後世界の政治家たちは国際連盟を結成し、軍縮協定によって、持ち過ぎの軍艦などを自国の手によって処分し、これで地上に、もはや戦争は起こり得ないと宣言し、恒久平和への夢があわや実現するかに見えた。そしてその20年後第二次大戦は前大戦の数倍の大量殺戮と文化の破壊を繰返した。国際連盟は国際連合に変わったが、加盟先進21カ国はすべて核軍備撤廃に反対である。しかも被爆者の悲痛な叫びをよそに被爆国たる日本自身がこの21カ国に含まれているのである。このあきれはた結論には目をつぶったとしても、先の見えた管理社会、政治不信、教育の荒廃、受験地獄、校内暴力と、マスコミによって言いふらされた観念盲像の面は多分にあるにしても、これらが青年の心を蝕んでいることは確かだろう。

しかし私には何やらもっと恐ろしい予感がある。つまりこれらの社会的、外的な支障がすべて解決されたとしても、いやむしろ世の中に何の問題もなくなったときにこそ、虚無と廃退が人類を襲うのではないかと。パンを

得るための労働が、立身出世へのしのぎを削る闘争が虚無を解消するのか？ 将来への漠然たる不安を感じて自殺していった作家は、マズローの5段階欲求をことごとく満たされた人だった。

分子生物学の日本における先駆者渡辺格先生がテレビでこんな意味のことを言っておられた。「私は生物の起源と生の目的を知りたいために生物学をやったし、いまでもそれを追究している。しかし現代の分子生物学は遺伝子組換えで人間に役に立つ植物や生物を作ることに専念していて、その技術は途方もなく発展し、私などはおちこぼれ的存在になった。」この話の中に現代の人類の病根があるのではないかと、私には思われてならない。

生の目的と意義、その永遠の間、ソクラテスの間、に対する答が人間には解っていない。その無知に気づかずして、人類はエゴイズムにもとづく合利主義に走った。もともと理性は、前提から結論への推論を正確にたどるためだけの道具で、前提そのものの真偽を判定する能力は皆無である。合理主義では前提そのものをどうとるかには自由だ。人類はその前提にエゴを置いた。そして、客観的表現に好都合にできている論理は人々を説得し続けた。「二二が四」と言われれば、心がおかしいなと思っても、「へい」といって引き下ろざるを得ない。かくして論理の雲は地上を覆い、あこがれや情熱や愛や神聖なものへの畏敬の念が軽蔑と嘲笑の対象にされた。その結果はどうだろう。あらゆる分野で、物質文明はイナゴの大量繁殖のように繁殖し人々を襲い、発見の喜びも、未知へのあこがれも、知識を楽しむゆとりもない利潤追求と業績競争に人々を駆り立てた。

人類は自分自身の生の目的も意義も見出せず、みずからも律してゆけないおろかな存在なのではないだろうか。人類の祖アダムとエバは、神の言いつけを守らず、善悪を知る木の実を食べた罪によって創造本然の状態から疎外されてしまった。人類は最初から失敗したのだ。人類は今やすべてを捨て、洗い直して再び創造本然の姿に立ちもどらねばならないのではないだろうか。

(r)